

プラネテス

幸村 誠 作

未来の宇宙空間を舞台にした作品です。デブリ（宇宙空間を浮遊しているゴミ）の回収をしながら、木星探査船の搭乗員を目指すハチマキが主人公。アニメ化もされ、ファンも多いようです。実はこの数年間、本作品の事を思い出すことは無かったです。今回再読して、自分自身が本書から大きく影響を受けていた事を知り、驚いています。

特に木星探査船の設計制作責任者のロックスミス氏には、強く影響を受けていました。彼は300名を超える人々が犠牲になった事故に対し、文字通り「眉一つ動かさず」対応します。責任を追及する声にも耳をかさず、この仕事ができるのは自分だけと、平然としています。周囲に冷酷と言われても動じない彼の強さに感動し、「男子たるもの、かくあるべき」と思い、目標としていました。

「科学技術の発展や開発は、必要か否か？」は、現実世界でも常に議論になる事です。例えば、「費用のかかる宇宙開発をするよりも、飢えている人を助けるべき」「命を犠牲にしてまで、新しい技術を開発すべきではない」など。その議論に対し、本作品では、ハチマキの恋人タナベが「愛」を説きます。「愛の無い選択は、決して良い結果にはならない」とハチマキの迷惑を無視して行動します。その言動には屈託がなく、周囲を啞然とさせます。

倫理とは、正義とはという議論に対し、「愛」は答えになるのか？ 再読してやっと判った本書のテーマです。

T
M



講談社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞